

国際関係理論におけるコンストラクティヴィスト・アプローチの再評価 ——メタ理論からみたウェント、オヌフ、クラトクウィルの論考を中心に——

重 政 公 一

はじめに—国際関係理論におけるコンストラクティ
ヴィストの転回

- 1 コンストラクティヴィズムの意義
 - 1-1 はじめに存在論ありき
 - 1-2 コンストラクティヴィスト・アプローチの認識論へのシフト
- 2 コンストラクティヴィスト・アプローチのメタ理論—社会理論からの接近
 - 2-1 メタ理論からの枠組み
 - 2-2 実証主義—説明
 - 2-3 理念主義—理解
- 3 コンストラクティヴィスト・アプローチ論争?—ウェント、オヌフ、クラトクウィルを中心に
 - 3-1 実証主義との折衷様式のコンストラクティヴィスト・アプローチ—ウェント
 - 3-2 解釈的コンストラクティヴィスト・アプローチと批判的コンストラクティヴィスト・アプローチ—オヌフ、クラトクウィル再訪
- 4 批判的コンストラクティヴィスト・アプローチの課題—結びに代えて

はじめに—国際関係理論におけるコン ストラクティヴィストの転回

国際政治（現象）を分析するためにわたしたちは通常、自分なりの見方や視点などから捉えようとする。既存の枠組みにしたがって、国際関係におけるパワー（力）やインタレスト（利益）から国際関係の諸断面を捉えることが国際関係を理論的に分析するための中心な捉え方であったし、われわれの自分なりの視点はそこに主眼があっても当然である。しかし、そこで看過されているか、過小評価

されている要素にはさほど意味がないのであ
ろうか。

コンストラクティビズム（社会構成主義）は国際関係における規範（ある社会的行為を予期させてくれるルールや規則）、信条、知識、アイデアといった主流的なアプローチが看過してきた要素を国際関係論に戻す試みである。したがって、観念的要素（ideational factor）を重んじるが、パワーや利益といった要素も忘れていたわけではない。コンストラクティビストにとっては、国際関係に現れる事象には観念的要素とパワーや利益といった物質的な要素（material factor）の双方が影響していると考ええる。

国際関係をアクター（より詳細には、ある目的意識をもった行為主体のことを指す）と国際構造との相互構成の関係を観念的な要素と物質的な要素から分析することにコンストラクティヴィズムの目的がある。コンストラクティヴィストに共通した点は、知識の社会的構成と社会的現実の構成である¹⁾。前者は、アクターのもつ観念的要素が他のアクターとの間で共有され、共通した知識となることを指す。ここでは、アクターの知識の形成には物質的な要素に基づく利得計算はもちろん存在する。しかし、その利得計算をするうえで前提となるのは、アクターのもつ観念的な考えが鍵を握るのである。例えば、ある国家(核保有国)が敵対する国家(非核保有国)に対して、攻撃というオプションを実行しようとする。その際に、軍事手段である攻撃目標を

1) Emanuel Adler, "Constructivism and International Relations," in Walter Carlsnaes, Thomas Risse and Beth Simmons, *Handbook of International Relations* (London: Sage Publications, 2002), p. 95.

一撃で壊滅できる大量破壊兵器が一番てつとり早い武器であるとする。しかし、現実の国際政治では核兵器という圧倒的な物質的なパワーをもつ国家であったとしても、その使用が利得計算のうえから有利であったとしても使用はしないであろう。それは核兵器使用にともなう道義性の問題や大量破壊や人命の損失など攻撃された国家以外の国からも非難を浴びることは必定だからであろう。したがって、こうした判断にはアクターの行為を抑制する考えが介在し、国際社会のなかで大量破壊兵器を使用しないことが国際社会の信頼に足りるメンバーの一員であるという意識が影響していると考えられる。

また、後者の社会的現実の構成とは、アクター間の共通の知識が構造化され、間主観的に理解されることを指す。アクター間で大量破壊兵器の使用が国際社会でタブーであるという共通の理解があれば、実際の使用は想定できず、核兵器は存在しても使用できない兵器であるという了解に至り、これが社会的現実となる。同様に、ある特定の地域でアクター間で諸問題を解決するために武器の使用に訴えない共通のルールが明文化され、共有される場合、その地域では不戦の共同体ともいうべき安全保障共同体が構築されることになる。

この2つのレベルの社会的構成を分析するために、コンストラクティヴィストは通常、知力のあるアクター (knowledgeable agent) から出発する。アクター間の知識の共通の理解が、やがてアクターを越えて広くアクターを取り巻く国際環境にも伝播され、間主観的な理解に至る。また、国際環境からの変化がアクターがこれまでにもっていた知識の理解に変化を及ぼし、異なった理解が生じることもあり、アクターの共通の理解の修正を促すことにつながることもある。こうしたアクターと国際構造との関係は双方向的であり、われわれがアクターとして持つ知識というの

は、したがって再帰的 (reflexive) なのである。

本稿ではコンストラクティヴィズムの観念的な要素の基盤である知識を重要視し、この知識を理解し、国際関係論の分析するためのツールとしての規範と言語の関係を挙げ上げる。このため、コンストラクティヴィズムが国際関係理論のなかに登場してきた過程を存在論からまず説明する。次にアクター間の知識としての規範や言語を社会理論のなかで分析する。これはコンストラクティヴィズムには色濃く社会学理論が反映されているからである。そして、メタ理論としての社会理論とコンストラクティヴィズムの関係をみた場合、コンストラクティヴィズムは多様なアプローチが内包されていることを浮き彫りにする。ここではウェント、オヌフ、クラトクウィルといった代表的な国際政治理論家の論考を中心にコンストラクティヴィスト・アプローチの特徴を説明した後、批判的コンストラクティヴィズムに向けた研究プログラムを提示する。

1 コンストラクティヴィズムの意義

1-1 はじめに存在論ありき

国際政治理論におけるコンストラクティヴィストのアプローチの興隆にはいくつかの理由があるが、最も説得力をもちうるのは冷戦終焉についての説明であろう。それは、ネオリアリスト、ネオリベラリストといった国際政治学の主流理論に挑戦するものであった。こうした主流理論が冷戦構造の終焉につながった劇的な変化を予測することに失敗したことに触発され、コンストラクティヴィストは、自らの主張を存在論のレベルで際立たせた。彼らは、政治的な考えや知識に対する思考の余地を捉えようとし、そのような観念上のファクターが持ち込まれる制度の機能をとらえようとした²⁾。

こうしたコンストラクティヴィストによる

試みは、存在論のレベルでは結束しているものであると考えられている。ここでいう存在論 (ontology) とは、国際政治とは何から構成されているかについて問うものである。コンストラクティヴィストは、主体となるものが他の主体と相互に行為してゆくことを通して、彼らの世界を作るのだと主張する。つまり、その相互行為のプロセスの中で主体の選好や利益は決定され、主体に固有の性質は国際システムの構造と共に決められることになるのである。著名なコンストラクティヴィストであるウェント (Alexander Wendt) は、ギデンス (Anthony Giddens) に頼りつつ、このような概念化は、構造化理論の下で主体と構造とが相互に構成される点と共鳴するものだとして記している。存在論のレベルに焦点をあわせたこのような意見は、ネオリアリズム (neorealism) やネネオリベラリズム (neoliberalism) といった主流国際関係理論が、アクターの選好や利益は固定されているものだとする考え方とは対照的である。

したがって、コンストラクティヴィスト・アプローチにおいて最も特徴的な点は、その存在論の中に見出すことができる。ラギー (John Ruggie) によれば、コンストラクティヴィストによる存在論上の仮定は「(ネオリアリズムとネネオリベラリズムの、むしろ物質的で固定された利益やアイデンティティとは対照的に) アクターの外見と行為を形成するような、文化やイデオロギー、原則に基づいた信念に至るまでの、付加的な観念上のファ

クターすべての列を、特定の政策課題における因果的な知識の上にはっきりと描ける」³⁾ ようにすることを可能にするのである。またレウス＝スミット (Christian Reus-Smit) は、コンストラクティヴィストにおける三つの存在論的命題に注目している。

「彼らは、アクターの社会的アイデンティティを定義し、どのようにして自分達のいる物質的環境を解釈するかを形作るにあたって、規範的・観念的な構造が重要であることを強調する。また、アクターの社会的アイデンティティが自分達の利益に影響する方法や、そのような利益を現実のものとするために用いる戦略に重きをおく。そして、アクターの見識ある実践と社会の構造との間で相互に構成されてゆく関係を強調するのである。」⁴⁾

しかし、存在論以外の認識論、方法論の双方から国際関係理論が依拠しているより高次のメタ理論的から接近してみると、異なるコンストラクティヴィスト・アプローチが可能となる。そのような研究は最近に主に大陸ヨーロッパにおいて、ドイツ語圏研究者によってなされているものである⁵⁾。そのため、この研究における第一の焦点は、コンストラクティヴィストの諸アプローチの間でそれらを区別することになる。この試みは、ウェントが、彼の著作である『国際政治の社会理論』(*Social Theory of International Politics*) の中で論じて

2) 拙稿 'The End of The Cold War and the Constructivist Ascendancy' 『国際公共政策研究』第5巻第1号 (2000年11月)、233～256頁。

3) John Gerard Ruggie, *Constructing the World Polity: Essays on International Institutionalization* (New York: Routledge, 1998), p. 33.

4) Christian Reus-Smit, *The Moral Purpose of the State: Culture, Social Identity, and Institutional Rationality in International Relations*, p. 165.

5) Karin M. Fierke and Knud Erik Jørgensen (eds.) *Constructing International Relations: The Next Generation* (Armonk, New York: M.E. Sharpe, 2001)、Maja Zehfuss, *Constructivism in International Relations: The Politics of Reality* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002).

いる点、つまり、コンストラクティヴィズムの存在論的主張を第一に正当化すること、そしてその結果、コンストラクティヴィズムの認識論的な主張を横へ置いておくことは逆のものである。彼によれば、「コンストラクティヴィズムは認識論のように広くではなく、存在論として狭く構成されるべきである。」⁶⁾ そのようなウェントのアプローチは中道的コンストラクティヴィズムとみなされている。

彼が、自らの社会理論の中に、分析の道具としての「中道」⁷⁾を位置付けようとする一方、そのアプローチは、主体の本質や理解の上での明瞭さに対してウェントが然るべき注意を払うことに失敗してしまっている点で、本稿が紹介する他のコンストラクティヴィスト・アプローチとは著しく対照的である。このことは、一部には、ウェントのコンストラクティヴィズムが主体を無言の存在として扱っていることに起因する。この中道をいくアプローチを改善するために求められることは、「主体が実際に何をやったのか以上に、自由な主体が何か別のことを行うオプション」⁸⁾を蘇らせる、ということである。これを分析するためには、存在論を越えて行為主体の行為をどのように把握すべきかという認識論への探求が必要となってくる。

1-2 コンストラクティヴィスト・アプローチの認識論へのシフト

前節で述べたコンストラクティヴィズムにおける重要な側面を照らすような訴えを反映させるために、そのようなメタ理論的な土台を研究する一つの方法として、コンストラクティヴィズムに対する様々なアプローチを概説し、その上で中道的なものからより省察的な傾向をもつアプローチを区別することが考えられる。

このために、オヌフ (Nicholas Onuf) とクラトクウィル (Friedrich Kratochwil) によって進められたコンストラクティヴィズムの基本的なアプローチを再訪する必要がある⁹⁾。

とりわけ、コンストラクティヴィズムという用語を国際関係論の分野に初めて導入したのはオナフである¹⁰⁾。彼の視点は、行為する主体の言葉による言説によって代わる代わる生み出されるような、国際的領域における言葉が持つ社会的機能と、ルールを作り上げる実行を概念化する点を真剣に捉えるものである。このグループに属するコンストラクティヴィストは、言葉の役割を重視している。フェランド (Christopher Farrands) は、この国際関係論におけるコンストラクティヴィスト・アプローチの中で、言葉の果たす役割について以下のように説明する。

「たとえ、言葉と、物質的な構造の進歩や、行為・相互行為の世界の進歩との間の区別が、言葉からの観点で順々に描写され理解されることがあっても、それらは互いに作用し

6) Alexander Wendt, *Social Theory of International Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), p. 41.

7) Wendt, *ibid.*, p. 38.

8) Andre Kukla, *Social Constructivism and the Philosophy of Science* (London: Routledge, 2000), p. 3.

9) オヌフ、クラトクウィルのアプローチを簡単に概略したもの、拙稿「ニコラス・オヌフ」、「フリードリッヒ・クラトクウィル」猪口孝、田中明彦、恒川恵一、薬師寺泰蔵、山内昌之編『国際政治事典』弘文堂、2005年、166頁、275頁。

10) Nicholas Greenwood Onuf, *World of Our Making: Rules and Rule in Social Theory and International Relations* (Columbia: University of South Carolina Press, 1989).

あっているものである。」¹¹⁾

このような言述的な洞察をオヌフはウィトゲンシュタインの言語行為論に沿って、自著の初めの章の中で次のような重要なコメントを述べている。

「コンストラクティヴィズムは、行為 (deeds) によって始まるものである。行為がなされ行動がとられ、語が話される—これらがすべて、諸々の事実が存在するということになるのだ。」¹²⁾

ウェントの中道的なコンストラクティヴィスト・アプローチとは対照的に、これは「解釈的コンストラクティヴィズム」とよぶべきものである。ここでは、「言語行為」¹³⁾として共通に知られているもの、即ち、社会生活の中でルールを形成してゆく際の言葉の言説が持つ影響力を明らかにしようとする。それは、主体による目的にかなった行為—対立や協調したりする—の意味を理解する上での助けとなることを目的とする。コンストラクティヴィスト・アプローチにおけるこの類型が持つ利点というのは、言語行為という主題、つまり、ルールと規範との相互作用に着目する点である。このアプローチによるならば、国際情勢の中では三種類のルール／規範が働いている。制限的（規則的）な効果、あることを可能にする（構成的な）効果、そして最後に遂行的（随意的）な効果の三つである。更に、解釈的コンストラクティヴィズムはウェントによって進められたような「薄い」中道的アプローチの持つ価値を低くすることへとつながってゆく。

それゆえ、本稿におけるコンストラクティヴィスト・アプローチは、中道的アプローチ以外のアプローチを再訪し、それらを再評価することである。このためにわれわれの理解を助けてくれるものが、国際関係理論におけるこうした理論的アプローチが依拠しているより高次の理論（メタ理論）から分析である。この社会理論は、実証主義と批判的理論との論争のなかに見出すことができる。先に触れたウェントのアプローチとオヌフやクラトクウィルの解釈的コンストラクティヴィズムのアプローチとは、この社会理論における対抗関係と軌を一にしているように思われる。

次章では本稿が重視するコンストラクティヴィスト・アプローチの原型（プロト・タイプ）ともいえるべき解釈的なアプローチと批判的社会理論との間にある、両立可能なつながりをみてゆき、この社会理論による、国際関係論のコンストラクティヴィズムに対しての貢献を明らかにする。このような試みは、二つの用語の類似性という点から試みられるべきではなく、共通のメタ理論的土台の観点から両者が比較されることを必要とする。ここでは、特にクラトクウィルによると、解釈的コンストラクティヴィズムが、とりわけハーバーマス（Jürgen Habermas）によって出された批判的社会理論の主張のいくつかを満たすものであること、また、それが「批判的」コンストラクティヴィズムと名付けられるような理論化へと新しく方向付けができることが論じられる。

ハーバーマスは自らのキャリアを、社会科学の知識に向けてアプローチする手法は自然科学の知識に対するそれと統一されるべきだとする実証主義者たちの見解を超えた、意味

11) Christopher Farrands, "Language and the Possibility of Inter-community Understanding," *Global Society*, Vol. 14, No. 1, 2000, p. 93.

12) Nicholas Greenwood Onuf, *World of Our Making: Rules and Rule in Social Theory and International Relations*, p. 36.

13) John Searle, *Speech Acts* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969) and Peter Winch, *The Idea of a Social Science and Its Relation to Philosophy*, Second edition (London: Routledge, 1990).

すること—理解することのアプローチに賛同しながら、社会学理論の実証主義的手法に反対する議論から開始した。その上で彼は言語行為論に依拠した。ハーバーマスにとって、この理論は言説と人間の行為とをつなげるものであったからである¹⁴⁾。彼は更に、コミュニケーション的行為といったより重要な考えを展開し普及させた。コミュニケーション的行為とは、主体相互の理解とコミュニケーションの合理性へと到達することを目的とした行為のことである。ルース (Lars Lose) は、コンストラクティヴィズムのなかにハーバーマスが占める位置について、次のように説明する。

「問題の中心となるのは、主体同士の間で事実上構成されてゆくダイナミクス (力) を概念化することであり、また、国家間における行為、特に協調に向けての努力を理解するうえで非常に重要な、意味の集合的構造を概念にすることである。コンストラクティヴィズムと、ハーバーマスによるコミュニケーションの合理性の理論に従って概念化されたコミュニケーション的行為に対する注目とを組み合わせることは、この問題に対する一つの可能な解決方法として見出されうるものである。」¹⁵⁾

2 コンストラクティヴィスト・アプローチのメタ理論—社会理論からの接近

これまでに言及した中道的なコンストラクティヴィスト・アプローチと解釈的コンストラクティヴィスト・アプローチ、さらには「批

判的」コンストラクティヴィスト・アプローチの間には共約可能性があるのか。あるとすれば、存在論以外に何を共通理解とするのか。この問いに対しては、下の図が参考になろう。

2-1 メタ理論からの枠組み

この図は、国際関係理論を論ずる際のコンストラクティヴィスト・アプローチと社会理論の双方に関連して鍵となる概念のいくつかを図にしたものである。横軸は、コンストラクティヴィズムが依拠する高次の社会理論のなかの重要となる三つのフィールド、すなわち実証主義、解釈主義、批判的社会理論を描いている。実証主義とは自然科学の方法をもって分析の対象とする社会的現象にも適用すべきと考える。一方、解釈主義、批判的社会理論はこれに反対する立場を採る。解釈主義は人間の行為の意味を理解するためには、人間の情感や共感といった理念をテキストから汲み取ることがを主張する。批判的社会理論は、実証主義の考えの上に構築された社会からの解放を目指し、このために規範的要素を全面に打ち出し、理念や規範を非科学的とみなす実証主義とは一線を画する¹⁶⁾。

こうしたメタ理論を背景にすると、この図からは様々なコンストラクティヴィスト・アプローチをみることができる。社会的構成主義とは、実証主義者による説明の領域と、ポスト実証主義者における理解の領域との間にある中間の立場を位置を占めている。ホプフ (Ted Hopf) はこの相違を見事に言い表している。つまり、「コンストラクティヴィズムが、それ自身と、起源である批判理論との間に理論的・認識論的な距離を作っている範囲において、そのアプローチは「型にはまったコン

14) マイケル・ビュージ (山本啓訳) 『ユルゲン・ハーバーマス』岩波書店、1993年、133頁。

15) Lars G. Lose, "Communicative Action and the World of Diplomacy," in Fierke and Jorgensen (eds.) *Constructing International Relations*, p. 181.

16) 拙稿「批判的国際理論」野口和彦、吉川直人編著『国際関係理論』勁草書房、近刊参照。

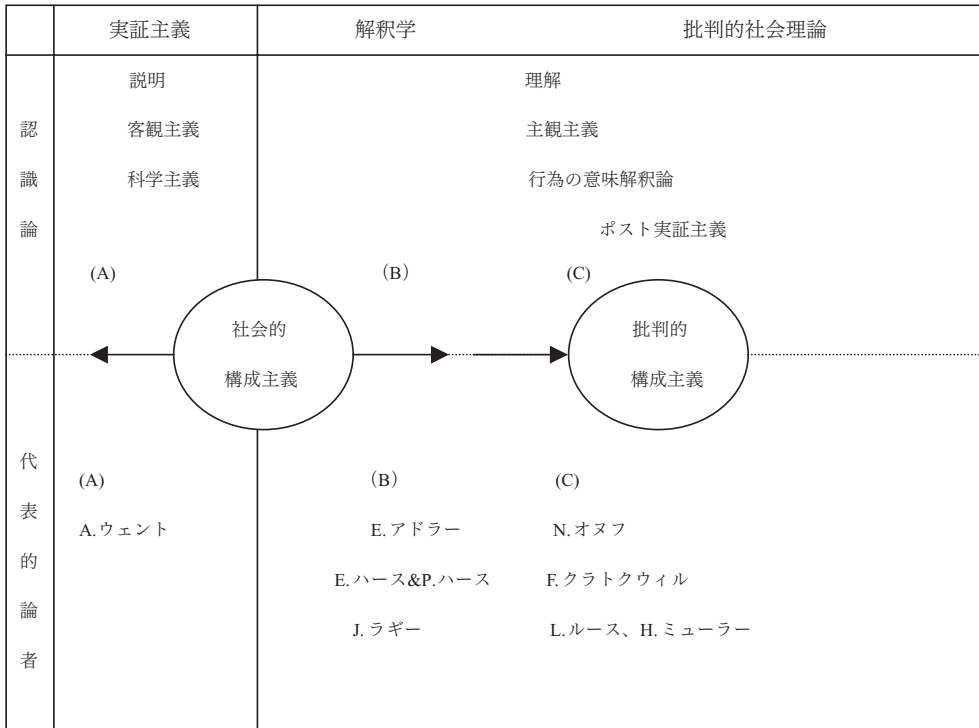


図 コンストラクティヴィスト・アプローチとメタ社会理論との相関関係（出所：筆者作成）

ストラクティヴィズム」（つまり、ミドルグラウンド的コンストラクティヴィズム）になるのだ。」¹⁷⁾ コンストラクティヴィズム研究の多くは、アドラー（Emanuel Adler）の言葉を借りるなら、「中間の立場を了解している」と思われる¹⁸⁾。A のベクトルが示すように、実証科学に傾くコンストラクティヴィズムを最も代表しているのは、ウェントによる論考である。また中道のコンストラクティヴィストのなかには、実証主義、非実証主義の違いを不問にして、対象としての事例を分析するツールとして活用しているものもある。この B のベクトルに傾くアプローチを E. ハースと P. ハースは「実践的（pragmatic）コンス

トラクティヴィズム」と呼ぶ¹⁹⁾。C へのベクトルを指すようなアプローチは、解釈的コンストラクティヴィズムであると考えられる。これを代表しているのは、オヌフとクラトクウィルである。そして、認識論的関心が C の方向へと動いてゆくとき、そこには、批判的コンストラクティヴィズムともいべき視点—解釈的なコンストラクティヴィズムと批判的社会理論からの重要な洞察が混ぜ合わさるような立場が存在する。

2-2 実証主義—説明

認識論の違いに関連した国際関係理論の立場を説明するうえで有益な見方に「説明」と

17) Hopf, "The Promise of Constructivism in International Relations Theory," p. 181.

18) Emanuel Adler, "Seizing the Middle Ground: Constructivism in World Politics," *European Journal of International Relations*, Vol. 3, No. 3, 1997.

19) Peter Haas and Ernst Haas, "Pragmatic Constructivism and the Study of International Institutions," *Millennium: The Journal of International Studies*, Vol. 31, No. 3 2002, pp. 573–601.

「理解」という言葉がある。ホリス (Martin Hollis) とスミス (Steve Smith) の言葉を借りるなら、実証主義者は、認識論的な意味においては、説明をする側に立っている。社会科学者にとって、「人間を優先するような学問分野の多くは、観察のできないような、しかし知ることができればと望んでいるものを示す²⁰⁾」ものなのである。「国家」や「社会」、そして、「国際システム」のような主体を把握し、それに対して言及するために、説明と理解という二つの広い認識論的図式が提示されてきた。

前者は、研究の対象というものが独立して存在するものであり、そこに起こる出来事の因果関係のメカニズムを、一団の仮説を立てて、それを社会の現実と対比させつつ演繹的に試験することによって説明しようとするものである。それによる知識は、実証主義者にとって客観的であると仮定される。彼らは、自然科学において要求されるものと同様の科学の方法を手順として踏んでいるからである。実証主義者たちは、社会科学が、その方法において自然科学と統一されるべきであるという旨を信じている。説明に対するこのような見解は「包括する法則 (covering law)」という形として考えられ、そこでは社会における出来事に関して観察可能な法則が導かれ、一個の観察者によって、経験的に評価されることになる。包括する法則の下に観察可能な諸々の事実が組み入れられること、そしてそのような法則を発見すること、これらが

実証主義者を導く考えであり、これによって観察する者は将来の出来事を予測することが可能になるのである²¹⁾。

ヘルド (David Held) によると、彼らの目標とするものは、「知識に対して、客観的で経験に基づいた、体系的な基盤を構築する」²²⁾ ところにある。観察する者の立場というのは、中立公平なものである。というのも、「実証主義的な方法論とリサーチ・デザインによって生み出された知識は、研究者自身による価値へのコミットメントの影響を受けないもの」²³⁾ だからである。そのため、この立場にある者は中立的な位置に立っていて、社会的な事実を作り上げることはしない、このように見られているのである。社会理論の領域において、この説明を擁護するものは科学主義 (scientism) と呼ばれることがある。ハーバーマスによれば、このような立場は、「我々が、科学を、もはや一つのありうべき知識の形としては理解できない、それ以上に、それを科学と共にある知識として見出さなければならぬ信念」²⁴⁾ であるとされる。

国際関係論においてこのことが有した意味は、おそらく、「科学革命」として性格付けられる影響をもたらしたものであるといえよう。この影響は、1960年代にこの学問領域の中へ入り始めた。行動主義者は、実証主義的方法に従って発達したのと同じ形で因果関係の道すじを導こうとした。このことは、伝統的な立場に立つ者同士、つまりそのアプロ

20) Donald Puchala, "Woe to the Orphans of the Scientific Revolution," in Robert L. Rothstein (ed.) *The Evolution of Theory in International Relations* (Columbia: University of South Carolina Press, 1991), p. 47.

21) Mervyn Frost, *Ethics in International Relations: A Constitutive Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p. 16.

22) David Held, *Introduction to Critical Theory: Horkheimer to Habermas* (Berkeley: University of California Press, 1980), p. 164.

23) Mark Neufeld, *The Restructuring of International Relations Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), p. 35.

24) Jürgen Habermas, *Knowledge and Human Interests*, translated by Jeremy Shapiro (Boston: Beacon Press, 1971), p. 4.

一チに対して理論化することを哲学や歴史、あるいは法から導くことを強調する者と、科学的な手法を優先する旨を強調する者との間での「第二の論争」として、一般的に知られている²⁵⁾。

これとは対照的に、1980年代後半から始まった、いわゆる「第三の論争」と呼ばれるものは、社会科学の様々な知の主張の組み込みを目の当たりにした。コンストラクティヴィストは、国際関係論において支配的であった実証主義者による方向性を反省し、再考するに至ることが可能となったのである。クラトクウィルは、コンストラクティヴィストによる様式からのこのような認識論上の再考について、次のように主張する。すなわち、「代替となるべき主張というのは、まずもって、知識というものが単純に一つの認識様式において導かれるべきではない、と提起する。とりわけそれというのも、科学の中においてさえ、一つの基準へと演繹されないような異なった根拠というものが数多く存在するからなのである。」²⁶⁾

2-3 理念主義—理解

実証主義とは対照的に解釈主義や批判理論といったものは、人間の行動の中で理解に到達し、また、その意味を見つけるためのアプローチであるとされている。そのようなポスト実証主義者にとって、「対象である世界というものは、常に自分達の対象—そして自分達の解釈による世界なのである。」²⁷⁾ この立場は、反実存主義 (anti-realism) と呼ばれる。そこにおいては、世界が、自分達自身やその

意識、用いる言葉とは独立して存在していないことが主張される。デランティ (Gerard Delanty) は、観念論的／解釈学的アプローチが持つ主な特徴を次のように要約している。

- 1 解釈 観念論は、説明や描写といったものが、解釈、即ちそれ以上に観察するところまで推量不可能なものに比べて下位に属する点を支持するものである。社会の現実において複雑な本質が与えられている以上、科学者というものは現実が有するより深いレベルへと到達するために、現実を解釈しなければならない。
- 2 反—科学主義 観念論的アプローチを支持する者は、社会科学と人文科学が、その方法についても、またその事柄についても、自然科学からは厳密に区別されることに対して賛成する。
- 3 価値の自由 観念論的アプローチは、価値について自由な立場であると考えられてきた。つまりこのアプローチが、実証主義的社会科学をその出発点とはしないことを意味している。
- 4 言語学的コンストラクティヴィズム このアプローチは、社会の基本構造として言葉がいかに重要であるかを強調するものである。社会というものが、言語の上でもそして意味の上でも、構成されているとみなす。
- 5 間主観性 観念論的解釈というのは、それが科学の対象との間に間主観的な関係

25) Hedley Bull, "International Theory: The Case for a Classical Approach," in Klaus Knorr and James N. Rosenau (eds.) *Contending Approaches to International Politics* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1969), p. 20.

26) Friedrich Kratochwil, "Constructing a New Orthodoxy? Wendt's 'Social Theory of International Politics' and the Constructivist Challenge," *Millennium: Journal of International Studies*, Vol. 29, No. 1, 2000, p. 73.

27) Held, *Introduction to Critical Theory*, p. 164.

28) Gerard Delanty, *Social Science: Beyond Constructivism and Realism* (Buckingham: Open University Press, 1997), p. 40.

が存在することを示唆する点で、実証主義とは一線を画する²⁸⁾。

3 コンストラクティヴィスト・アプローチ論争?—ウェント、オヌフ、クラトクウィルを中心に

3-1 実証主義との折衷様式のコンストラクティヴィスト・アプローチ—ウェント

ウェントのコンストラクティヴィズムが占める位置は、彼によるキー・タームの導入によって独自のアプローチを提示している。その中においても、科学的事実主義 (scientific realism) が挙げられる。ウェントは、「国際的な構造」にみられる社会の本質の存在が、実際の中では観察できないものであると考えている。主権や、バランス・オブ・パワー、国際的な構造など、国際関係論がその対象としているものの大部分は、もちろん、我々の目には見えない。加えて、自然科学において求められるように、経験上同じ手順を踏むことも不可能である。このような前提から、彼は「全ての概念は経験から導き出され、知識を表現するすべての主張は、それが正当なものであることを実験に依拠する」²⁹⁾と主張する経験主義、つまり、実証主義が有する信条の一つから自分の議論を始めているのである。ところが、彼が社会生活の中で観察できないものに気づくためには、科学的事実主義の論理を導入してこなければならない。科学的事実主義とは、「明らかに直接観察可能なものから、観察がまず不可能な理論上の仮定に至る間でそこに一本の線があること以上に、それらのものをひとつの連続するものと

考える主張に共感する」³⁰⁾のものであると考えられる。

研究の対象となるものの多くが、目に見えず観察できないものである国際政治学において、この最後の点は学問の根本をなす性質に対して言及するものである。そのため、研究者の多くはこの点に対して否定しない。コンストラクティヴィスト達は、物質上の世界が独立して存在することについて否定はしないものの、彼らが引き合いに出してくる社会の現実というものは、常に我々の意識と言語とに依存しているとみなす。オヌフやクラトクウィルに見られる、解釈的コンストラクティヴィストとは異なって、ウェントは、「意味が社会生活の中で作り上げられてゆくことを通してプロセスが概念化される」³¹⁾というような方法では論を進めない。

解釈的コンストラクティヴィストに影響を与えたサルは、言葉というものが本質的に制度上の現実を構成するものであると論じている³²⁾。反面、ウェントの科学的事実主義にみられるように、言葉が果たす役割を考慮しないのであれば、コンストラクティヴィストによる試みにみられる、いかにして一つの社会現実を作り出してゆくのか、という問いに対して、細かく述べられないままになってしまう。

ウェントは自分のアプローチを社会的現実に適用する方法に関して、二つの種類のもの—因果的なもの (causal) と構成的なもの (constitutive) とを同時に提起している。それによって、これら二つの異なる論理は一つのものとなっている。

彼によれば、因果論は「なぜ」を問いかけ、

29) Alan Bullock et al. (eds.), *The Fontana Dictionary of Modern Thought*, p. 269.

30) Joseph Rouse, *Knowledge and Power: Toward a Political Philosophy of Science* (Ithaca: Cornell University Press), p. 130.

31) Erik Ringmar, "Alexander Wendt: a social scientist struggling with history," in Iver Neumann and Ole Waever (eds.) *The Future of International Relations: Masters in the Making?* (London: Routledge, 1997), p. 276.

32) John R. Searle, *The Construction of Social Reality* (New York: The Free Press, 1995), chapter 3.

ある程度までは「どのようにして」を問い掛けることに専念している。その一方で、構成論は「いかにして可能か」について取り組んでいることに専念して、「何が」を問おうとするものである。自然科学者は前者を用いる反面、社会科学者は後者を用いる³³⁾。

コンストラクティヴィストの理論においては、物質的、観念的、双方のファクターが一つの社会における現実を組み立てていて、ウェントの科学的実存主義を導入することは、これら双方のファクターからなる社会の性質を説明するためなのである。そのため彼にとって科学的実存主義は、一度に、物質的なファクターを因果論的な手法で適切に取り扱い、観念論的なファクターを構成的な手法で取り扱うものと理解されるのである。

しかし、ローズも言うように、このような融合というのは科学的実存主義による主張に対してはむしろ相反するものとして現れてくる。彼らは、構成的に理論を組み立ててゆくよりも因果的にそのようにすることを優先させるはずであるが、ウェントは双方の形の理論化を同時に利用しているのである。したがって、ウェントは本来の科学的実存主義の論理を国際関係の分析に適用する際に因果的論理と構成的論理を融合せざるを得ないのだ。

このようなウェントの試みに対して、解釈的コンストラクティヴィストは「常に語るべき物語は二つ存在するのだ」——つまり説明すること（因果論的に理論を組み立てること）と理解すること（構成論的に理論化すること）と主張し、ウェントの折衷主義を回避することが可能であると考える³⁴⁾。この因果論的な理論化と構成的なそれとのどちらが国際関係

論においては重要なのか、この問いをめぐることは、ウェントとホリス、スミスとの間で論争となった。ウェントにとって自らのコンストラクティヴィズムは、世界政治における、物質的・観念的双方のファクターを包摂するものであり、二つの形の理論化を同時に含んでいるべきものである。そのため、彼は「残部の物質主義 (rump materialism)」という概念を導入する。これは通常物質的ファクターの基礎として考えられているパワーが、その本質上観念的である利益によって構成され、同様に、利益がアイディアによって構成されることを関連付けしようとする試みのことをいうのである³⁵⁾。彼にとって、パワーや利益の根底にはアイディアがあるということを説明し、このパワー、利益、アイディアの相互関係を捉えるために残部の物質主義が必要になるのだ。ウェントによれば、「行き着くところアイディアがその根底にある (Ideas are all the way down)」という主張を国際関係の分析に適用することは、今述べた残部の物質主義を正当化させるものとなりうる。

この残部の物質主義に対しては、批判的コンストラクティヴィストは、声高にこれを主張するようなことはしない。その理由のひとつは、彼らがこの物質主義に対しての批判、あるいはウェントによる折衷主義のいずれかに同意しがちであることによるであろう。とりわけ先の図のなかで示された実践的コンストラクティヴィズムはウェントの主張に同意する。しかし、コヘインはウェントの物質的・観念的二分法という「誇張され誤った方向へ導かれた」議論に対する批判を展開する³⁶⁾。コヘインによれば、この二分法は、ウェント

33) Wendt, *Social Theory of International Politics*, pp. 77–78.

34) Martin Hollis and Steve Smith, “Beware of Gurus: Structure and Action in International Relations,” *Review of International Studies*, Vol. 17, 1991, pp. 407–410, and Martin Hollis and Steve Smith, “Two Stories about Structure and Agency,” *Review of International Studies*, Vol. 20, 1994, pp. 241–251.

35) Wendt, *Social Theory of International Politics*, Chapter 3 “Ideas all the way down?: on the constitution of power and interest,” pp. 92–138.

のコンストラクティヴィズムを国際関係理論における主流理論から区別しないものである。というのも、「対外政策というものは、一方においては物質的な能力と利益から、他方ではアイデアと価値から導かれるものだからである。どちらが根本的な世界であるのかを選ぶとすることは、思慮ある試みとはあまり言えないからである。」³⁷⁾

ウェントの折衷主義に対する批判に対して、ホリスやスミスとの論争のなかでウェントは、この事柄について自らの結論へと到達していた。つまり、国際関係理論における認識論的な問いを避けることによって研究者達は理論を因果的にも構成的にも組み立てることに関与できるというものである³⁸⁾。ウェントによる答えは、ある人間がどのような研究上の問いかけをすることができるのかというなかにあった。つまり、「いかに」、「どのようにして」という問いと、「いかにして可能か」、「何が」というものとのなかにである。ところが彼にとって、「世界政治におけるアイデアの役割と、社会構造についてのコンストラクティヴィストに特有の仮説というのは、まずもって、そのような構成的な影響に関するものなのである」³⁹⁾。批判的コンストラクティヴィストは、構成的な理論の組み立てを優先するウェントのこの引証に対して同意するところが多い。プライスとレウス＝スミットは、このことに対して次のように仄めかしている。

「コンストラクティヴィストと実証主義者とは、時に同じ問いに対して答えを出そうとすることがある。そこでは、異なる認

識論上の、そして方法論上の立場というものが、現在考えている問いに関連した形で議論される。また。時には、研究者は異なる形の問いかけをすることもある。……自分達の出発点として諸々の問いを取り挙げることは、自らの分野において、世界政治を理解するという側面では何がいったい本当に問題となっているのかに関して優先順位をつけることになる。世界についての説明は、それが実証主義者のものであろうとコンストラクティヴィストのものであろうと、すべて部分的なものである。そして、いずれかに代わって主張される最高のものとは、問いにおける被説明項を十分に理解することが求められるようなある出来事や現象の諸々の側面を明らかにするものである」⁴⁰⁾。

3-2 解釈的コンストラクティヴィスト・アプローチと批判的コンストラクティヴィスト・アプローチ—オヌフ、クラトクウィル再訪

ウェントのコンストラクティヴィズムが一つの「主流」であり、これに対する反論を提示するなかで、別のコンストラクティヴィズムが表立ってくる。解釈的／批判的コンストラクティヴィストは、観念論者や解釈論者を自分達の先駆者としてみなしている

それらは、1960年代の社会・政治理論においては知識についてのポスト経験主義的理論を蘇らせ、1980年代においては国際関係論研究においてポスト実証主義を巡る第三の論争 (The Third Debate) をもたらすことになった。彼らのようなコンストラクティヴィ

36) Robert Keohane, "Ideas Part-way down," *Review of International Studies*, Vol. 26, 1999, p. 128.

37) *Ibid.*, p. 129.

38) Alexander Wendt, "On Constitution and Causation in IR," *Review of International Studies*, Special Issue: The Eighty Years' Crisis 1919-1999, Vol. 24, 1998, pp. 115-117.

39) Wendt, *Social Theory of International Politics*, p. 78.

40) Price and Reus-Smit, "Dangerous Liaisons? Critical International Theory and Constructivism," pp. 279-280.

ストにとって、この「ポスト」論争は様々な理由から有益なものであった。たとえば、ポスト経験主義における言語論的転回は、オフヌがその著書である『われわれの構成する世界』(*World of Our Making*)の中で示したコンストラクティヴィズムの原型に影響を及ぼしたと考えられている。それはクラトクウィルによるコンストラクティヴィズムについても同様である。彼は「たとえ日常用いられる言葉と言語行為論という方向性が、必ずしもコンストラクティヴィズムの様式で研究を進めてゆく上での前提ではないにしろ、多くのコンストラクティヴィストがこれらに影響されてきた」⁴¹⁾ことを認めている。「人々は言葉を、自らの行為を表象し、またそれを行うという双方のために用いるのである。物を話すということは何かをすることと同じである。人々が直接に、社会の諸目的を遂行することを通して発話つまり行為をすること——が言語行為なのである。それに加えて、ルールというものは言語行為から形作られるものである」⁴²⁾。そのため、ルールと規範について方向性を持っているようなコンストラクティヴィストにとっては、ウェントが注意を払ってこなかった言語行為の中で表現される諸々のルールがひとつの社会を構成することになる。ハーバーマスは、言語行為論が持つ図式に内在し、そこに起源をもつ行為について、次のように要約をしている。

「発語行為を通して、話し手はあるものごとの状態を表現している。つまり何かを話している、ということである。発語内行為を通して、話し手は何かを言う中である

行動をとる。発語内の役割が文の様式というものを決定するのである。…それらは、意見の表明や約束、命令、公言などの形で用いられる。…最後に、発語媒介行為を通して、話し手は、聞き手にある影響を作り出す。

ひとつのスピーチを行うことによって、話し手は、世界の中に何かを引き起こすのである。よってオースティンが区別した三つの行為というのは、次のようなキャッチフレーズの中で特徴付けられる。

つまり、何かを言う。何かを言う中で行為する。そして、何かを言う中で行為することを通して何かを引き起こす、ということである。」⁴³⁾

より特定して、ハーバーマスは話し手と聞き手の間にある関係についての上述の二つの行為のことを、更に次のように主張する。

「発語内行為によって、話し手は自分の言うことが挨拶であるとか、命令であるとか、警告、説明などであるように理解されることを望んでいるのだ、という点を聞き手に知ってもらおうとする。話し手がコミュニケーションをする上で持つ意図というのは、聞き手に自分の発語行為がはっきりとした中身を理解してもらうように望む以上のものではないのである。これとは対照的に、話し手が持つ発語媒介上の狙いというのは、一般に目標に対しての方向を持つ行動と共に推し進められる狙いと似ていて、言語行為の中で明確な内容の結果ついてくるようなものではない。つまり、この

41) Friedrich Kratochwil, "Constructing a New Orthodoxy? Wendt's 'Social Theory of International Politics' and the Constructivist Challenge," p. 74.

42) Harry D. Gould, "What is at Stake in the Agent-Structure Debate?" in Vendulka Kubalkova, Nicholas Onuf, and Paul Kowert (eds.) *International Relations in a Constructed World* (New York: M.E. Sharpe, 1998), p. 81.

43) Jürgen Habermas, *The Theory of Communicative Action: Reason and Rationalization of Society*, Vol. 1, translated by Thomas McCarthy (London: Heinemann, 1984), pp. 288–289.

狙いというのは話をする主体が持つ意図によってのみ、見出されるものなのだ。」⁴⁴⁾

国際関係論において「言語論的転回」というものは、言語行為論と言語ゲームとを安全保障研究の中へと導入することを助けるよい機会となる。というのも、対話をする者が話す言葉の使用や解釈によるならば、安全保障がより「確かなものになった」のか「悪化した」のか、その考えを抱く上で理解を容易にしてくれるからである。根本的な次元では、言葉は「我々をその中心において人間たらしめる一部である」⁴⁵⁾と見られることがある。プレイデル (Alan Pleydell) によれば、「我々が使う言葉は、自分達の状況が持つ特徴をなしているものである。もしそこに言葉がないのであれば、我々は自らの状況についてはいかなる考えも持ちえない。そのとき我々は、諸々の事柄における全体的な状態に関しての、単なる不可分な一部でしかなかったであろう」⁴⁶⁾。更にウィーバー (Ole Waever) は、安全保障についての言語行為 (security speech act) として、発話状況の中で安全保障を概念化させようとしている。

話すということは何かをすることである、と主張するオヌフやクラトクウィルと同じ立場に立ちながら、ウィーバーは次のように言う。「安全保障を発話することで、国家の代表というのは特定の新しい事実をある特定の領域の中へと動かしてゆく。そしてその結果、彼らは、それを守るためにはいかなる手段を用いることをも必要となる特別な権利を主張するのだ」⁴⁷⁾。

安全保障に関する言語行為というテーマ

を、国際関係論研究へとつなぎ合わせるといふ点については、「宣言的政策」としてよく知られている事例にみることができる。例えば、頻繁に「語られている」中国の核・安全保障政策をみてみよう。中国はこの政策によって、核兵器を持たない国に対して「安全保障上の消極的な保証」を与えているとする。この宣言の根底に存在する発語内行為は、中国政府はそのような非核国に対しては自国の核戦力でもって攻撃を加えないということになる。そのため、発語媒介行為はそれほど露骨なものとはならないことが考えられる。しかし逆に中国は、核をもっていない国々はそのままの状態であるべきだ、という旨のメッセージも主張していることがわかってくるのだ。

では別の例として、中国政府による「一つの中国」政策についての主張を取り上げてみよう。中国政府は、「反逆国家」とみなしている台湾に対して、万一台湾が大陸から独立を宣言する場合には、必要であればその動きに対して武力を用いることも躊躇しない旨の主張を繰り返し行っている。発語における力を伴うこの意図は、発語媒介的な効果をもたらすことになる。この発語媒介的な効果は、台湾に対して独立を宣言しないこと、そして少なくとも現状を維持することに対して影響を及ぼし、またはそのように強いることになる。同時にこの効果を通して、中国政府は一つの中国政策が第三国によって侵害されることを望まず、この状況に対して外からの力が介入することも許さない、というメッセージを主張することもできる。そのため、この研究の中で適切に活用されるのであれば、我々は、

44) *Ibid.*, p. 290.

45) Alan Pleydell, "Language, Culture and the Concept of International Political Community," in James Mayall (ed.) *The Community of States: A Study in International Political Theory* (London: George Allen & Unwin, 1982), p. 168.

46) *Ibid.*, p. 169.

47) Ole Waever, "Securitization and Desecuritization," in Ronnie Lipschutz (ed.) *On Security* (New York: Columbia University Press, 1995), p. 55.

安全保障が言語行為であるというテーマより、安全保障協力に特徴的なものについて、言語ゲームを繰り返し行うことによって構築することができるのだ。

しかし、国際関係論という分野において言語学的ファクターに焦点をあてたアプローチというのは何も目新しいものではない。例えば三十年以上も前に、フランク (Thomas Franck) とワイスバンド (Edward Weisband) は、二つの超大国間関係における言語上の戦略を分析し、次のように所見を述べた。「ことば (words) に関する戦略を効果的に用いるには、現在行っている行動に関して、目の前の目的を達成することに役立つような諸原則が求められることのみならず、その原則が後に宣言をした者の長期的利益に反するものとしてはね返ってこない、ということもまた求められる」⁴⁸⁾。

言語論的転回についての最近の潮流は、解釈的コンストラクティヴィストとの間で密接な関係にあるのだが、この流れは、競合する話し手によって明確に述べられる、言語行為論という発語内行為と発語媒介効果とに、われわれの関心をより向けさせている。そのため、コンストラクティヴィストの論考においてこの言語論的転回が導入されるという重要性は、社会が「その現実を構成するものとしての言葉」という機能を有していることを我々に教えてくれるのである。実証主義者の見解に見られるように、「客観的事実を鏡のように映すものとしての言葉」⁴⁹⁾ に対してのみ、単に関心を寄せているわけではないのである。解釈的コンストラクティヴィストも批判的コンストラクティヴィストも、言葉によ

る意見表明というものがそれとしてひとつの行為である、ということを含んでいる。世界情勢は、話され、書かれたものであり、言葉によって作られた世界の一部として存在している。言葉とは、世界で慣例的に起こる出来事を示すシンボルを表すような音であり、その言葉が世界情勢を作り上げるのに十分なものであるなら、それらが世界情勢として存在するのである⁵⁰⁾。

4 批判的コンストラクティヴィスト・アプローチの課題—結びに代えて

本稿は国際関係理論の有効なアプローチであるコンストラクティヴィズムについて、存在論、認識論から考察を進め、メタ理論における認識論の違いからいくつかのコンストラクティヴィスト・アプローチを提示した。こうしたコンストラクティヴィスト・アプローチの間にこれまでの国際関係理論でみられたような大論争は起こりそうにない。その理由は大多数のコンストラクティヴィズムによる研究が図のベクトル B に位置付けられる実践的立場を占めていて、認識論から国際関係理論を分析することを回避していると思われるからである。これはとりわけ、アメリカ人の研究者が用いるコンストラクティヴィスト・アプローチにみられる。一方、ヨーロッパ系、特にイギリスやドイツの研究者は認識論を踏まえた論考を提示する傾向にある。

本稿で説明した批判的コンストラクティヴィスト・アプローチは言語を媒介とする規範の構築、さらに規範的構造が埋め込まれた国

48) Thomas Franck and Edward Weisband, *Word Politics: Verbal Strategy among the Superpowers* (New York: Oxford University Press, 1971), p. 6.

49) K.M. Fierke and Knud Erik Jorgensen, "Introduction," in Fierke and Jorgensen (eds.) *Constructing International Relations*, p. 7.

50) Ralph Pettman, *Commonsense Constructivism: Or the Making of World Affairs* (Armonk, New York: M.E. Sharpe, 2000), pp. 32–33.

際的な構造と主体との相互作用に重点をおく。こうしたアプローチにはどのような今後の研究課題があるのだろうか。実践的コンストラクティビズムと比較すると、実証的な研究の数は劣る。だからこそ、コヘインの言うように、独自の研究プログラムを蓄積していかない限りは、社会理論に依拠した一つのアプローチとして自己完結し、知識が細分化してしまう可能性もある⁵¹⁾。

批判的コンストラクティビズムの研究プロ

グラムの一つに言説、言語ゲーム、修辞（レトリック）を研究手法として援用するものも近年現れてきている⁵²⁾。批判的コンストラクティビズムがオヌフ、クラトクウィルのいわば原型から発展して自らの存在意義をコンストラクティヴィスト・アプローチのなかに際立させるためには、こうした新しい方法論を認識論と組み合わせた研究内容の充実にあると思われる。この点に関する方法論的アプローチからの考察は論を改めて検討したい。

51) Robert Keohane, "International Institutions: Two Approaches," *International Studies Quarterly*, Vol. Vol. 32, No. 4, 1989, pp. 392-393.

52) K. M. Fierke, "Dialogues of Manoeuvre and Enlargement: NATO, Russia, and the CEECs," *Millennium: The Journal of International Studies*, vol. 28, No.1, 1999, Vendulka Kubalkova, "Towards an International Political Theology," and Carsten Bagge Laustsen and Ole Waever, "In Defence of Religion: Sacred Referent Objects for Securitization," *Millennium: The Journal of International Studies*, vol. 29, No.3, 2000, and Frank Schimmelfennig, *The EU, NATO and the Integration of Europe: Rules and Rhetoric* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003.)